

## 「蛇性の姪」における人物形象の創作と中国白話小説の影響について

中 田 妙 葉

「蛇性の姪」は、短編集『雨月物語』の中で、唯一の中編作品である。そのため、他の八編は、各巻に二編ずつ収められているなか、巻之四はこの一作品だけを収めている。この作品は、中国明代の馮夢龍が編纂した白話小説集『警世通言』第二十八「白娘子永鎮雷峰塔」の翻案であり、その構成、人物設定、文辞を踏襲した創作である。また、清の古呉墨浪子編する白話小説集『西湖佳話』巻之十五「雷峰怪蹟」も参照し、さらに『源氏物語』を織り込み色々な角度から王朝ロマンの風雅を醸し出させた。その他、日本の典籍では『伊勢物語』、『万葉集』、さらには安珍清姫の道成寺説話が巧に利用され、中国の典籍では『五雜俎』や『剪灯新話』の「牡丹灯記」、「翠翠伝」、「渭塘奇遇記」等が指摘されている。

## 一 人物形象の重要性の発見

中村幸彦氏は、中国白話小説が日本の戯作へ及ぼした影響について、「近代小説が開眼されたとする前に、中国白話小説と中国におけるその批評が、小説の進歩に貢献してきたことを高く評価すべきであろう。」と述べ、中でも人物の「個性」・「性格」が、プロット展開に働きかけるといふ、人物形象の重要性を発見したと指摘する。

金聖歎は『水滸伝』の「読第五才子書法」の中で「水滸伝写一百八個人性格、真是一百八様」などと「性格」の語をしばしば用い、最も多くの文字をついやした李逵を初めとし、幾人かの人物を評している。勿論、『水滸伝』の人物は甚だ類型的で、近代小説の性格と等しくはないが、中国小説に接した上田秋成や曲亭馬琴らは、気質物の気質とは違った性格が小説に必要なことをこれらによって悟った。

近世小説以前の中世説話は、事件を述べる小説であるため、ストーリー第一主義であり、類型的である。それに対し近世小説以後の近代小説は、人間を語る作品であることから、登場人物達の性格やその葛藤など、心理の推移が尊重されている。ゆえに、ものの見方、考え方が個性的で写実的になっていくが、これは作家の個性への自覚をともなった批判的精神があつてこそ、はじめてなしうることである。

秋成は『水滸伝』で、きわめて明晰な性格の人物達を知った。そして、国学者でもあつた秋成の作品では、寓意を人物の性格と行動に託し、事件を引き起こす人間の「性」に着目する。出来事の発端を、人が本来そなえて

いる「性<sup>さが</sup>」を基としてとらえ、作品を作り上げた。それが『雨月物語』であり、『雨月』は「性格」を意識した作者による、日本最初の作品であるといわれる。<sup>(3)</sup>

「蛇性の姪」も他の作品と変わらず怪異を描いた作品であり、豊雄が夢中になった蛇精が怪しい魔力を重ねること、展開する物語である。しかし、その主題は、「あだ心」から「まめ心」へと転ずる豊雄の人間の成長によって、妖魔を克服することにある。話の筋を固めて進める要因を、作中人物の性格の変化に託しているところ、当時には珍しい構成であり、そして、『雨月』の人物の性格の中で最も成功したのは、「蛇性の姪」の豊雄であるといわれるゆえんである。

豊雄は文弱な性格故に、熊野で蛇妖真女子の魅入るところになる。吉野で、当麻の酒人に「雄気して」と励まされ、己が心の正しからぬを反省し、親兄に仕えようと紀州に帰る。そして芝の里では自らを犠牲にして、蛇妖からの万事を解決しようと決心する。このように豊雄は「丈夫心」を奮い起こした結果、法海和尚の与えた袈裟で大蛇を「力をきはめて押ふせ」る勇気が持て、自ら妖魔を払いのけるのである。神官や高僧の励ましや、法力の援助があつたにしても、性格の推移を描いた作品というのは、近世小説としては稀有であつた。

## 二 「蛇性の姪」豊雄と「白娘子永鎮雷峰塔」許宣の人物像の比較

「蛇性の姪」は「白娘子永鎮雷峰塔」の全体の構成から人物の設定、部分の趣向、文辞に至るまで、多くの要素を引き写したものである。しかしながら、秋成はかなり自由な取捨選択を行ったので、原話とは話こそそそく

りであっても、その世界・主題・思想等々、すべてにわたってかなり違ったものになっている。そして、これが後世に引き継ぐことの難しかった、秋成の翻案方法である。そこで、「蛇性の淫」の要となる豊雄と、原典「白娘子」の許宣の人物像を比べてみよう。

豊雄は、紀州三輪崎の網元の次男坊である。父母は健在で、兄は質朴な「よく生産を治む」働き者である。姉は大和の豊かな商家へ嫁いでいる。家業は網元であるから生活は豊かであり、激しい肉体労働が要求されるが、それは兄が担っている。豊雄は末っ子で甘やかされ、生来勤労を好まず、文学や学問などの、浪費的な風流を好んだ。つまり、田舎には珍しい、線の細いデリカシーのあるインテリ青年である。世俗的には非生産者で余計物とされる位置づけだが、両親は豊雄の性格や能力を見極めて、好きな学問をさせてやろうと伸び伸び育てたので、性格は素直で、「生長優しく」、思いやり深く、温順誠実な性格の青年に生長していたのである。

では、粉本の「白娘子永鎮雷峰塔」で許宣は如何に描かれているかという点、都会育ちではあるが、だからといって都会人を強調する性向、または男気のある特徴が仕立てられているわけではない。両親を幼い時に亡くし、叔父の薬屋の通い番頭をしている。特に薬に詳しいとか、高才があるわけでもなく、眉目秀麗というわけでもない。「白娘子」では、中心人物が白娘子であり、彼女の妖術と行動を通して話が展開していく。許宣は白娘子が事件を展開させるための役割にすぎない。白娘子のような、個性的な人物像を持っているわけではない。無論、軟弱な性格から勇氣ある強い人間へと成長する過程が、描かれているということもない。しかしながら、豊

雄という人物形象の意味をはかる上で許宣と照らし合わせてみると、その虚弱化と、改篇の意図がみえてくるのである。

豊雄とは、「常に都風たる事をのみ好て、過活心なかりけり」という性格である。つまり、常に興味のある学問など風雅な世界に意識を向け、現実に向きあう勇氣のない若者である。ゆえに、生活上困難が生じたときには、ただそこから逃げるのみで、現実に向きあうこともできず、対処するなどほど遠いことである。それは豊雄が真女子と再会する場面に表れている。

盗品を手にしたことから、疑いを晴らすために豊雄は武士を真女子の邸宅へ連れて行く。しかし邸宅は荒れ果て、そこにいた真女子は雷を起こして逃げてしまった。奇怪な出来事のお陰で、事件は妖怪の仕業という裁きになり、豊雄の疑いは晴れる。彼は大和の姉のところを寄せるのだが、そこまで真女子とまろやが追いかけてきた。すると豊雄は、「あな恐ろしとて内に隠るる。金忠夫婦は何ぞといへば、かの鬼ここに逐来る。あれに近寄玉ふなと隠れ惑ふを、……」と、現実から「隠れ惑う」ことしかしない。それに対し、同じ状況下になりながら許宣は違う様子を見せる。追いかけてきた白娘子と青青を見るなり、

连声叫道：「死冤家！自被你盗了官库银子，带累我吃了多少苦，有屈无伸，如今到此地位，又赶来做什么？可羞死人！」（大声で怒鳴り「この野郎！お前が盗んだお上の金のせいで、俺がどれだけ苦勞させられたか。濡れ衣も晴らすことができず、やっと今落ちついたっていうのに、また何しに来やがった。この死に損ないが！」）

と、彼女達は妖怪ではないかと思いがちでも、逃げ惑うことなく、面と向かって罵り、自分の怒りをぶつけている。白娘子が、その事について説明したいから中に入れてくれ、といっても、許宣は「“你是鬼怪，不许入来。”挡住了门不放他。」（お前は妖怪だ、中に入れることなどできない」と、入り口に立ちふさがり、彼女を入れようとしない。）と、妖怪と対峙している。このことから、豊雄は、許宣から妖怪に罵り対峙するような勇氣も度胸も取り上げた人物として、仕立て上げられているということが、明白であろう。

許宣は貧しくとも、薬屋の雇われ店主として生活している。豊雄とは違い、現実に向かい慎ましく自らの営みを行っている、一般市民なのである。それに対し豊雄は、困難に遭遇した際に逃げて隠れるだけの、いわば自活できない人物として仕立てられているのである。

このような性格的な弱さを持った男は、『世間妾気質』巻三「米市は日本一の大湊に買積の思入」「二度の勤は定なき世の蜷川の淵瀬」の才太郎として、既に秋成作品には登場している。そしてその原形は、青年時代の実家が油紙問屋でありながら家業もせず、文学青年としてかなり自由放縦な生活を送った「浮浪子」秋成自身である。<sup>(4)</sup>

また、豊雄の精神的成長の主題は、都賀底鐘の「繁野話」第八編「江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話」から継承している。<sup>(5)</sup> 徳田氏は、「江口」で然重が小太郎を諫めて正道に戻る契機を与える設定と、当麻の酒人が「丈夫心」を豊雄に勧告して、妖魔を克服するきっかけを与える設定や、場景・措辞が共通すること。そして粉本の

「白娘子」や「雷峰怪蹟」には精神的成長に則る妖魔の克服という設定はないということから、青年の精神的成長による危機からの脱却という主題を、「繁野話」の「江口」から取り入れたという。

確かに前述のように、豊雄は許宣と異なり消極的で、現実生活を営んでいけない虚弱な人格に形成されている。そして徳田氏の説を鑑みると、その作為の由縁は、豊雄が精神的成長をとげる主題を明確にするため、という意図もみえる。「豊雄独自の人格が与えられ、その人柄が生き生きと描き出され、リアルな人間像に作り上げられている」と感じられるのは、最初の性格設定を脆弱に設定したことで、成長の様子がより強調され、話の展開と豊雄の姿勢が上手く絡み合っているからである。豊雄の「性格」の形成もとは、世間気質であり『繁野話』だという説に反論するところは全くない。しかしながら、先に述べた通り、中国白話小説が当時の戯作家達に与えた影響の大きさを考えてみると、豊雄の性格は許宣と異をなすからといって、その人物形象に中国白話小説の要素は取り入れられていないといえるだろうか、という疑問が残る。

### 三 豊雄の精神的成長における特長

「江口」の粉本は、「白娘子」と同じ『警世通言』に収められている第三十二卷「杜十娘怒沈百宝箱」という作品である。粉本では主人公の李甲が、杜十娘を裏切ったことを恥じ、気がふれてしまうところで話は終わる。対して「江口」では、李甲にあたる小太郎は、然重の忠告に立ち直りの兆しをみせ、強く魅入られていた白妙の入水契機に現実に立ち返り、粉本とは異なる色彩の結末となっている。ここに底鐘が、小太郎の優柔不断からそ

の脱却へ、と精神の成長を主題の一つとしていたとみるのであるが、今一度「江口」と「蛇性の淫」二作品において、男性主人公が精神の成長をとげる重要な場面を較べてみたい。

正太郎の変心を怒った白妙は、珍宝と共に海中に投身し、彼の裏切りを責める。小太郎は自分の意志薄弱に大いに恥じ入ったが、ここで心を入れかえる。

きつと悟りて思ふに、女が深情にそむきたるは残念なれども、彼は浮花の身のうへ、我も若年の浮気放蕩、彼は彼が侠に死し、我はわが儂きにかへる。しりて惑ふは我ばかりかは。今さら遁世などせば、いよいよ人に笑われん。父の不興を佗て、家に帰るべし

と、家門を継ぐべく帰郷する。小太郎は、現実生活に対峙する勇氣を持ったのである。

しかし、豊雄が「丈夫心」を持つにいたる場面と較べてみると、どうしても説得力に欠ける気がしてならない。なぜなら女は入水して亡くなった。自分を惑わす対象がいなくなれば、正気に返るのは比較的簡単である。さらに帰郷するということも、亡くなった相手には情をかけていられないという薄情さを、正道をとることでごまかした態度のようにも取れる。確かに精神的成長を描いており、それが主題であることは明白だ。しかし、読者はこの場面で、小太郎の精神的成長をすんなりと受け入れることができるのだろうか、という感想をもつ。では、豊雄の場面はどうであろうか。



真女子は庄司の娘富子に取り憑いてしまう。その真女子を取り払い、富子を助けようとした鞍馬寺の法師は、蛇精の毒気にあたり、苦しんだ後遂に亡くなってしまふ。富子は人質に取られたようなものであり、そして死人も出たという惨事を目の当たりにした豊雄の心は、嘘のように落ちつき始め、

かく駿なる法師だも折得ず、執ねく我を纏ふものから、天地のあひだにあらんかぎりは探しえられなん。おのが命ひとつに人々を苦しむるは実ならず。今は人をかたらはじ。やすくおぼせ

といつて、皆が引き留めるのも聞かず、寝屋へ赴く。自分が行かなければ皆が被害を被り、どのような惨事にもなりかねないと悟つたからである。小太郎と大きく異なることに、この時は豊雄の命まで取られかねないという危機的状態である。つまり、自らの命を以て被害がこれ以上他の人間に及ばないようにと、「丈夫心」を奮つて蛇精に立ち向かうのである。この豊雄の場面と較べると、小太郎の心を入れ替える場面が、いかに生ぬるく舌足らずか、という感はぬぐえない。

富子に蛇精が取り憑く場面は「白娘子」にはないものだが、その後法師が蛇精を捕まえに行く場面では、また「白娘子」のプロットに戻る。蛇精に取り憑かれている富子が豊雄を脅しにかかるこの場面は、「雷峰怪蹟」を引用している。上段が「蛇性の姪」の本文、下段は「雷峰怪蹟」の原文である。引用したと思われる箇所——線をほどこした。

富子豊雄にむかひて、君何の讐に我を捉へんとて人をかた  
らひ玉ふ。此後も仇をもて報ひ玉はゞ、君が御身のみにあ  
らじ、此郷の人人をもすべて苦しきめ見せん。ひたすら  
吾貞操をうれしとおぼして、徒徒しき御心をなおぼしそ  
と、いとけさうしていふぞうたてかりき。豊雄いふは、  
……かりそめ言をだにも此恐しき報ひをなんいふは、いと  
むくつけなり。

ここは豊雄が意を決して蛇精に立ち向かう、という展開をなすための肝心な場面である。しかし許宣は全く反  
対の行動に出る。「帶累一城百姓都要死于非命」という同じ言葉に、おろおろするばかり。叔父は、赤山埠の張  
成のところを寄せて大人しくしていろ、と提案する。許宣の姿が見えなくなれば、妖怪は立ち去るだろう、  
というのである。術がない許宣はその案に従い、赤山埠に叔父の手紙を携えて赴くのだった。

町の人々の命を危険にさらすと言われてもおろおろする許宣に対し、秋成は豊雄に「自分の身の上」がどうな  
ろうと「此の郷の人々」を救わなければと、公の為に自己犠牲を払うという反対の態度を取らせた。それよりこ  
の場面は、豊雄が「夢見がちな性格」から脱却し、大きく飛躍を遂げる見せ場となったのである。この改編こそ  
「豊雄独自の人格が与えられ、その人柄が生き生きと描き出され」た、と読者に思わしめる箇所の一つであるこ

白娘子叫许宣入去，说道：“你好大胆！怎敢叫捉  
蛇得来捉我？你若和我好意，便佛眼相看；若不好  
时，带累一城百姓都要死于非命。”许宣听得，心  
寒胆战，不敢则听。

とに間違いはないであろう。そして、「秋成の場合、一件どんなに忠実な翻案であっても、少なくとも翻案という作業それ自体に秋成の旺盛な創作意欲が打ち込まれ、きわめて独自で自主的な世界がそこに築き上げられているという事実である。」<sup>⑦</sup>と評価されるにふさわしい、見事な改編場面であると思う。

しかしながら、この豊雄の「雄気し」た様を表現しながら、「丈夫振り」の本となる典拠は、未だ指摘されていない。主題を提供した「江口」の小太郎の成長ぶりは、豊雄にははるかに及ばないこと前述の通りである。恐らくそこが、「きわめて独自で自主的な世界」だということになるのかもしれないが、それにしても秋成の翻案の手法は、言葉一つに至るまで様々な典拠を網羅しており、「モザイク的」<sup>⑧</sup>と形容されるほどである。そして、幾多の典拠が緋い交ぜられることによって、新たな世界を醸し出すところが、翻案の妙の見せ所である。それは、「教養の集中的成熟を反映し、教養同志のアイロニーに目標を求めた『雨月』と、その時代の」<sup>⑨</sup>独特な性格に由縁をもつためである。

#### 四 「汪信之一死救全家」と豊雄の人物形象

前期戯作である『雨月』の読者層は、秋成自身とほぼ同等の教養をもつインテリか、文学愛好者であった。出来上がった物語の面白さよりは、原典の投影によって隠見する異同に翻案の妙をひらめかして見せるのがその持ち味であり、それを読み分けることこそ鑑賞の醍醐味だった。この小説の読者達は、目前の作品から原典の投影を一つ一つ探し出し、その準拠の種をつぶさにかいさぐって、両者を比較検討するという知的興味を先行させ

た。彼らに原典にない独自の主題を発見させることも、さらに渾然たる芸術美の昇華を見せるということも、それが済んだうえのことであった。このことから鑑みても、私はこの要の部分にもやはり典拠はあるのではと思う。そして、典拠作品として、中国白話小説「汪信之一死救全家」(『古今小説』第三十九卷)を挙げる。

この話は宋岳珂の『程史』に収められている。宋朝淳熙年間(一一七四—八九年)に起こった事件にもとづいて創られた、公案小説である。汪信之は移り住んだ土地で巨額な財を築き、勢力者となった。また、義に厚い人物として名高く、財に拘わらないため、官府にも沢山の友人ができ、人望も厚かった。ところが、汪信之は、些細なことから、程兄弟の陰謀にはめられてしまう。本来配下の民衆で組織した忠義軍を、朝廷に献上するつもりであったところ、程兄弟の策略で造反の証拠だと朝廷に誤解されてしまう。汪信之は豪俠で名の通っている人物であるため、彼と交流の厚かった郭將軍等官府の友人達は、彼の造反というのが信じられず、捕獲するという使命を帯ながらも、本人に直接会って真意を確かめたいと思っていた。しかし不運が重なり誤解が解けぬまま、追い詰められた汪信之とその忠信の者達は、身を守るために官府の者達に刃を向けることになり、結果殺人を犯し造反分子となってしまう。それでも、好漢の汪信之に好意を持つ者の温情に助けられる。官府は関係者全員から事情を聴取し、全ての事の発端は程兄弟にあるとの調べがつき、汪信之は造反の疑いを晴らすことができた。しかしながら殺人を犯し、世を騒がした罪は罪として、汪信之の死刑をもって、他の配下の者は鞭打ち並びに遠方の刑で済むこととなり、一件落着となった。

忠義の士が政治の暗黒の為に、社会的造反者とされてしまう悲劇が描かれているこの話は、『水滸伝』で忠義

の士が梁山泊に追いやられる話と、相似すると評される。「汪信之」の主題は、無論忠義である。汪信之を慕って辛苦を共にし、一身に彼を護衛していた配下の者達と、題名通り自らの死をもって、配下の命を救った彼の一連の行動を通し、忠義の志をもつ真の好漢の「丈夫振り」を描き出している。精神的成長を主題とし、豊雄に「丈夫心」を振るわせようとした秋成が、「汪信之一死救全家」の題名を見て、まず興味を引かれないわけではないと想像するのだが、如何だろう。実際、この作品から引用されている部分も見うけられる。上段は「蛇性の姪」の本文で、鞍馬寺の法師が富子を助けようとするが、反対に蛇精に酷くやられてしまう場面である。下段の「汪信之」の原文は、汪信之が焼き払った廟の神が、こらしめに彼を左足で蹴飛ばし、墜馬させた場面である。神は汪にだけしか見えなかった。

人人扶け起すれど。すべて面も肌も黒く赤く染なしたるが如に。熱き事焚火に手さすらんにひとし。毒氣にあたりたると見えて。後は只眼のみはたらきて物いひたげなれど。聲さへなさでぞある。水灌ぎなどすれど。つひに死ける。

刘青見汪革坠马，慌忙扶起看时，不言不语，好似中  
恶模样，不省人事。

文辞だけでなく、二場面の要素も、相似していることがわかる。法師、汪信之ともに、①彼しか見えない状況

で、②人でなく神怪に、③不思議な力を使われたのである。人力では敵わない相手から被害を被り、さらにこれらの事件は二話の主人公豊雄と汪信之にとって、これ以上為す術がない状況までに追い詰められる場面として設定されている。というのもこれらの件を通し、豊雄と汪信之はともに、一つの決心をする。自らの命をもって、禍が他に及ぶのを食い止めようとするのである。

①おのが命ひとつに人々を苦しむるは実ならず。今は人をかたらはじ。やすくおぼせとて閨房にゆくを、

……………

②此富子が命ひとつたすけよかし。然我をいづくにも連ゆけといへば。いと喜しげに點頭をる。

对襄四八等道：『感众兄弟相从不舍，①吾何忍负累！今罪犯必死，②此身已不足惜，众兄弟何不将我挪去送官，自脱其祸？』

この箇所は、先ほど挙げた豊雄の「丈夫心」が表れだした情景であり、蛇精と対峙して「丈夫振り」を全面に出す見せ所である。つまり「蛇性の淫」の主題を語るに最も重要な二箇所の場面に、「汪信之」が典拠として使われているのだ。このことから以下のことがいえよう。秋成は豊雄が義心を起こすまでの流れと、精神的に大きな飛躍を遂げた情景に、汪信之という義士の志を重ね、豊雄の内からみなぎる力を、創り出していたのである。

五 「人无害虎心、虎有伤人意」

「人无害虎心、虎有伤人意」という語句は、「白娘子」から引用され、豊雄が蛇妖の行いを咎める言葉として、「人かならず虎を害する心なければども、虎反りて人を傷つける意ありとや」と翻案されている。そして面白いことに、この語句は、「汪信之」にも存在する。もちろん、「蛇性の姪」が引用したのは、「白娘子」であろうとは思ふ。ただ、この語句は「蛇性の姪」と「白娘子」の二作品中では、全く反対の意味にも取れるのである。戯作では「人を傷つける意あり」の「虎」は真女子をさす。対して擬話本中では、戴先生は許宣に蛇退治を頼まれたことを、うっかり白娘子に言ってしまう。怒った白娘子はわざと正体を表して戴先生を威嚇して見せる情景後に、この語句が表れる。

那先生手中提着瓶儿，立在空地上。不多时，只见刮起一阵冷风，风过处，只见一条吊桶来大的蟒蛇，速射将来。正是：人无害虎心，虎有伤人意。

且说那戴先生吃了一惊，望后便倒，雄黄罐儿也打破了。

（先生は瓶を持ったまま、あき地に立った。すると、にわかひやりと冷たい風が起り、過ぎ去ったところに、釣瓶ほどの蛇が見えたかと思うと、矢のようにまっしぐらに向ってきた。まさに、人には虎を害するという気はなくとも、虎には人を傷つけようとする意があるということだ。さあ、先生は胆をつぶして後にひっくり返ると、酒瓶も割ってしまった。）

この箇所だけ見れば、確かに、威嚇してきた蛇が、戴先生に何をするかわからないという恐怖の思いを、述べているととれる。ところが、実際白娘子は誰も傷つけてはいない。戴先生にも威嚇して、逃げ帰らせたのみで、真女子のように命は奪っていない。彼女はただ許宣を慕ってついてくるだけで、まさに「无害虎心」である。そんな無垢な白娘子を捕まえようと、「伤人意」を起こしたのは許宣である。つまり、話のプロットからこの語句を再度眺めてみると、「人」は白娘子を指し、「虎」は戴先生に蛇退治を依頼した許宣を指しているように、読み取れるのである。

では「汪信之」はどのように使われているだろうか。汪信之は五百人余りの軍隊を率い、捕獲した郭都監を従え、大砲を放ちながら、何県尉を捕らえようと宿松に向かっている場面にあられる。

汪革引着一百人為前鋒，董三、董四、錢四二、共引三百人為中軍。汪世雄騎着小驄驢，却教養四八騎着惺惺驢相隨，引一百余人，押着郭都監為后隊。分发已定，连放三个大砲，<sup>10</sup>一齐起身，望宿松进发，要拿何县尉。正是：人无害虎心，虎有伤人意。（汪革は先鋒部隊として百人を率い、董三、董四、錢四二はともに本営となり三百人を卒いた。汪世雄は小さい栗毛色のラバに乗り、龔四六を赤馬に乗せて後に従わせ、百余人を卒い、後衛部隊として郭都監を護送した。それぞれ隊を組みそろえると、大砲を三発続けて放ち、一斉に進み始めた。目的地は宿松。目標は何県尉の制圧である。まさに、人は虎を害する気はなくとも、虎には人を傷つけようとする意があるということだ。）

（ここでは、「虎」は攻めの姿勢をもつ汪信之達だと取れる。しかし、やはり、彼らももとはといえば、造反の



意志などない「无害虎心」の徒である。それを何県尉などの官府や朝廷が、忠義の志に疑いをかけ、追い込んで、彼らを造反させるに至ったのである。ゆえに「虎」とは、汪信之が自らの軍隊を献上しようとした「朝廷」とも読めるのである。つまりこの語句中の「虎」は、表面上では意味もなく傷つけるような獣、または無頼の徒のようにみえるが、もとはといえば無垢で忠義な者が追い込まれ、自らの身を守るために、仕方なく攻撃をししかける羽目に陥った情況下で使われている、といえそうである。

そして、秋成はこの語句の含意を汲み取り見事に表現している。既に前述した真女子の脅し文句に対する豊雄の返答を次にあげる。その言葉には、真女子が純粋な気持ちを抱きながらも、行動にうつすと返って裏目にでてしまい、疎んじられる悲劇を感じさせられる。

豊雄いふは、世の諺にも聞ることあり。人かならず虎を害する心なけれども、虎反りて人を傷る意ありとや。備人ならぬ心より、我を纏ふて幾度かからきめを見するさへあるに、かりそめ言をだにも此恐しき報ひをなんいふは、いとむくつけなり。されど吾を慕ふ心ははた世人にもかはらざれば、こゝにありて人々の歎き玉はんがいたはし。

豊雄にとつて、真女子が付き纏つてひどい目に逢わせたり、報復の言葉を吐いて威嚇したりなどの行為は、とうに人間離れしており、耐え難いものではある。しかしながら、それら行為には、自分への慕い思う気持ちがある底にあり、それは世間一般の人々とどこも変わらない、純粋な想いであることを理解している。秋成は原典中でこの語句が意味するところを踏みつつ、簡単に善悪つけられない状況を、さらに言葉で言いあらわしているの

ある。

## 六 蛇妖の創作と典拠

次に場面を少しもどし、「蛇性の淫」で最も恐ろしい、蛇妖が富子に取り憑いた場面について考察したい。こ  
こは、「豊雄の恐怖が高まるに比例して、妖怪味のすさまじさは増加する。……三回目をむかえて、彼女の方も  
つきつめた精神状態といえるなら、その状態に達している。すなわちこれが最後の大詰に達した気迫が、そこに  
感じられる。」<sup>①</sup>という、怪異の最高潮の場面であるとともに、豊雄の「丈夫心」を奮い起こさせる契機となる、  
最も肝心な場面といえよう。

新婚二日目の夜、「酔ごこち」の語らいの中、富子の口を借りて発せられる恨み言は、まぎれもなく真女子の  
声であった。この部分は「白娘子」に「雷峰怪蹟」の語句を織り交ぜて創り上げている。原典と較べてみよう。  
（——は直接に引用していると思われるところ、……は原文の語辞を変えて趣向を引用したと思われるところである）

女打ゑみて、吾君な怪しみ玉ひそ、海に誓ひ  
山に盟ひし事を速くわすれ玉ふとも。(1)さる  
べき縁にしのあれば又もあひ見奉るものを。

・誓海盟山心已许（『翠翠传』『剪灯新話』）

・白娘子圆睁怪眼道：『小乙官，我也只是为好，谁想到成  
怨本！(1)我与你平生夫妇，共枕同袋许多恩爱，(2)如今却信

(2)他し人のいふことをまことしくおぼして、  
 (3)強に遠ざけ玉はんには、恨み報ひなん。紀  
 路の山山さばかり高くとも、(4)君が血をもて  
 峯より谷に灌ぎください。あたたら御身をいた  
 づらになし果玉ひそといふに、(5)只わな、き  
 にわな、かれて、(6)今やとらるべきこ、ちに  
 死入ける。屏風のうしろより、(7)吾君いかに  
 むつかり玉ふ。かうめでたき御契なるはとて  
 出るはまろやなり。

女は妖しく笑いながら、まるで何事でもないかのように、脅し文句をなよやかに口にする。この方が、恐ろしい形相で激しい言葉で言われることより、どれほど恐ろしいことだろう。粉本「白娘子」や「雷峰怪蹟」では激しい感情が言葉になり相手に迫り行く、すさまじい迫力を感じる場面である。秋成は同じ言葉を、丁寧かつ柔らかに言わせているのだが、その方が言葉通りに恐ろしいことが簡単に起こりそうだ、という不気味さを感じさせる。相手は、婚姻相手の身体にまでのり移るほどの、激しい感情と靈力の持ち主である。逃げ切れる相手ではな

別人閑言語、(3)教我夫妻不睦。我如今实对你说，若听我言语喜喜欢欢，万事皆休：若生外心，(4)教你满城皆为血水，人人手攀洪浪，脚踏浑波，皆死于非命。(6)惊得许宣战战兢兢，半晌无言可答，不敢走近前去。(7)青青劝道：「官人，娘子爱你杭州人生得好，又喜你恩情深重。听我说，与娘子和睦了，休要疑虑。」(白娘子)

・白娘子因接说道：「我与你做夫妻一场，并无亏负你处，为何反听外人言语，与我不睦？我妇人家既嫁了你，却叫我到那里去？」一面说，(5)一面便呜呜咽咽哭将起来。许宣急了，忙扯李幕事除去，(「雷峰怪迹」)

いと、豊雄だけでなく読者にも思わせるだけの説得力を持つ。改編の妙を感じさせる部分でもある。

そして、富子に蛇妖が乗り移って語り始めるといふ趣向は、一般に『源氏物語』夕顔巻によったといわれる。蛇妖が富子の口から言った言葉は、六条御息所の生霊が夕顔を取り殺す前に源氏の枕上で語る言葉によったものだといふ。夕顔の死は、昨今では古家に棲む妖怪のしわざとする見方が多いが、これも江戸時代には、六条御息所の生霊のなすところと考えられていた。

確かに、源氏が夕顔を見ながら六条御息所を思い出していた晩に、憑き物が出て恨み言をいう。その語辞はそっくり引用されている。だが、その憑き物は源氏の夢もとで言ったわけで、夕顔に憑いたわけではない。ここで、「蛇性の淫」の場面と「夕顔」の原文と付き合わせてみよう。全体的な比較をしたいため、少し長く引用する。上段が「蛇性の淫」、下段が「夕顔」である。

豊雄こゝに迎へられて見るに、此富子がかた  
ちいとよく万心に足ひぬるに、かの蛇が懸想  
せしこともおろおろおもひ出るなるべし。は  
じめの夜は事なければ書ず。二日の夜、よき  
ほどの酔ごゝちにて、年来の大内住に、辺鄙  
の人ははたうるさくまさん。かの御わたりに

内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこにも尋ぬらんと思  
しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱  
れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほし  
き筋はなつ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向ひをあはれと  
思すままに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまを、す  
こし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。宵過ぐるほ

ては、何の中將宰相の君などいふに添ふし玉  
 ふうん。今更にく、こそおぼゆれなど戯る、  
 に、富子即面をあげて、古き契を忘れ玉ひ  
 て、かくことなる事なき人を時めかし玉ふこ  
 そ、こなたよりまして悪くあれといふは、姿  
 こそかはれ、正しく真女子が声なり。

ど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女  
 て、「おのが、いとめでたしとみたてまつるをば、尋ね思ほさ  
 で、かくことなることなき人を率ておはして、時めかしたまふ  
 こそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人を  
 かき起こさむとすと見たまふ。物に襲はるる心地して、おどろ  
 きたまへれば、灯も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引  
 き抜きて、うち置きたまひて、右近を起こしたまふ。

言葉の部分は同じであるが、憑き物が夕顔に憑いて言った言葉ではない。夕顔は、「この女君いみじくわなき  
 きまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、我がの気色なり。」という様子で、言葉なく、苦  
 しんで亡くなった。恨み言をいった「物」と夕顔に憑いた「物」が同じかどうかはわからない表現になつてい  
 る。確かに秋成のみならず、『雨月物語』の読者も知識豊富であるゆえ、すぐに「夕顔」を思い浮かべたことと  
 思う。しかし、この話の骨格は、中国文学の中でも喜怒哀楽を明確に表現する白話小説である。「夕顔」のこの  
 箇所は貴族文学では匂わせる面白さを味わえる趣向であるが、戯作の「蛇性の姪」中に同じように引用しては曖  
 昧な表現となつてしまい、迫力に欠けると秋成は考えたのではないだろうか。ここは、源氏の夢もとに立つた  
 「物」と、夕顔に憑いた「物」が同じであると明確に表現するため、他の典拠も用いたと見るべきである

う。そこで、その典拠作品に「楊思温燕山逢故人」（『古今小説』第二十四卷）を挙げる。「楊思温」は『雨月物語』の他の作品「吉備津の釜」と「浅茅が宿」での引用が認められている。「楊思温」で引用されたと思われる場面は、韓思厚が亡き妻鄭義娘との約束を破り、金陵土星觀の觀主劉金壇という女道士の美しさに魅入られ、結婚してしまつたある晩のことである。

よきほどの酔よご、ちにて、年来の大内住に、辺鄙の人ははたうるさくまさん。かの御わたりにては、何の中將宰相の君などいふに添よぶし玉よふらん、今更よにく、こそおぼゆれなど戯よる、に、富子即面をあげて、古よき契を忘れ玉よひて、かくことなる事なき人を時めかし玉よふこそ、こなたよりまして悪くあれといふは、姿よこそかはれ、正しく真女子が聲よなり。聞にあさましよう、身よの毛もたちて恐よしく、只あきれまどふを、女打よゑみて、

且说那思厚共刘氏新婚欢爱，月下置酒尝玩。正饮酒间，只见刘氏柳眉剔竖，星眼圆睁，以手摔住思厚不放，道：“你忒煞亏我，换我命来！”身是刘氏，语言是郑夫人的声气。吓得思厚无计可施，道：“告贤妻饶恕。”那里肯放。正摆拨不下，忽报苏，许二掌仪步月而来望思厚，见刘氏摔住思厚不放。二人解脱得手，思厚急走出，

粉本では、妻鄭義娘夫人は金軍に襲われそうになったため、夫韓思厚のために貞節を守って自害した烈女である。鄭義娘の思いに感激した韓思厚は、絶対に再婚はしないと強く誓う。しかし暫くすると亡妻との約束を犯

し、さらには妻の墓参りにも行かなくなった。薄情な裏切り行為を受けた鄭義娘は劉氏に取り憑いて、夫に恨み言をいう。見目姿は劉氏であっても、声は明らかに鄭夫人である。韓思厚には、鄭義娘が自分を恨んで、憎い劉氏に取り憑いているのだと、鄭夫人の怨念が、劉氏の顔で恐ろしい形相を見せて恨み言をいつているのだと、明確に認識できる。

さらに「蛇性の姪」の富子と真女子の関係を、夕顔と六条御息所、そして劉氏と鄭夫人の両関係と較べてみると、後者達の関係により近いことがわかる。一つに、女に取り憑くのは、男の前夫人である。二つに、前夫人は我が身を惜しむことなく夫に尽し、夫を慕う深さは、周囲の知るところである。三つに、後妻は取り憑かれても直ぐに亡くならず、後に亡くなる。夕顔は取り憑かれて直ぐ亡くなった。対して劉氏は富子と同じく、取り憑かれた時には亡くなっていない。後に、江に遊ぶ船の上で鄭夫人の霊に髪を掴まれ、水中に引きずり込まれて亡くなるのである。しかし韓思厚は何の危害も加えられることなく、話は終わる。これは「蛇性の姪」で、「庄司が女子はつひに病にそみてむなしくなりぬ。豊雄は命恙なしとなんかたりつたへる。」と話を閉じているのと同じではないか。

以上からも、「蛇性の姪」の後半部分は、真女子の豊雄に対する執着の愛が極まってしまった状態を描くために、「楊思温燕山逢故人」の要素を取り入れたと思うところである。富子に取り憑くプロットは、まず六条御息所が夕顔を祟るイメージが先立ち、構想を練ったのだろうが、実際細部にわたる創作の下敷きとしたのは「楊思温燕山逢故人」であったのではなからうか。

他作品が「楊思温燕山逢故人」を引用した箇所は、磯良や宮木の霊が、夫の正太郎や勝四郎の目の前に現れ、恨みの想いを抱きながら憔悴した姿を見せる部分である。語辞の粉飾の相違から、各場面が恐怖をそそるか、憐れみを誘うかの様相は異なるが、趣向の基本は同じで、一心の想いを背かれて亡くなった妻が、夫に対して恨む想いを見せることにある。また、「浅茅が宿」では、宮木の想いを寄せた和歌に、鄭義娘の夫への想いを詠んだ歌を引用している。つまり、秋成は「楊思温」の鄭義娘に、女性の一途な想いと、裏切られたときの恐ろしさの要素の両方を携えた人物として描かれていることを見てとった。ゆえに彼女の言動を取り入れることで、女性のもつ心の強さや、一途な想いが執着の情愛と変わる恐ろしさを表現させようとしていたようである。

## 七 「丈夫心」と「真情」と

また「汪信之一死救全家」にも、女性の強さを物語るため、『孔子家語』の一句を挙げて説いている。

良薬苦口，忠言逆耳。有智夫人，賽过男子。（良薬口に苦し、忠言耳に逆らう。智有る夫人は、男子に勝る。）

ここでの「忠言逆耳」とは、汪信之の嫁張氏が、汪信之の大事を予測し、諫言したことを指す。張氏が適した助言をしたにもかかわらず、汪信之は心の油断と、考えの甘さから聞き入れなかった。<sup>12</sup> その結果、事が複雑化し、汪信之は命をおとすこととなったのである。また、三歳になる幼い孫を、危険から遠ざけるため呉郡に蔵匿するのだが、張氏は子供が去るのをみると、悲しみのあまり大泣きし、火に飛び込み自害する。続けて「若汪革



早听其言、岂有今日？」（もし汪革が早くに彼女の言葉を聞いていたら、このような事態には至らなかつたらうに）という悲嘆の言の後、先に挙げた語句が続くのである。

以上から「汪信之一死救全家」の引用は、豊雄の人物形象に汪信之の「義氣」を織り込み、氣概を持たせるためであることがわかる。汪信之は、互いの義侠心を念頭に置き、行動の全てを司る、典型的な義士である。豊雄は汪信之の言動をたどりながら、義氣という雄々しい勇気を注入していき、「丈夫心」を持つに至った。当麻の酒人の「雄氣してよく心を静ま」るようにといい忠告を聞き、それを心にとめて従つたからである。振り返って粉本を見ると、汪信之は豊雄と反対の行動をとった。嫁の張氏の忠告を聞かなかつたため、結果張氏の子測通り「弄假成真、百口难诉」となり、一家を救うには、自らの死をもつてせねばならなかつた。どうやら、秋成の考える「丈夫心」とは、物事に真つ向から取り組む勇気とともに、人の忠告を聞くという謙虚な気持ちも必要だといふことらしい。

「楊思温燕山逢故人」の引用は、蛇妖真女子に、心の強い女性の執拗な愛情を具現化する意図があつた。「真情」は、本人が想いに曇りがないと自負するだけに、強靱である。真つ直ぐである故に執拗となり、受ける側は恐怖を感じずにはいられない。しかし本人には、その行為自体が相手に恐怖として感じさせているとはわかつていないものだ。あなたを一心に想っているのに、「君何の讐に我を捉へんとて人をかたらひ玉ふ」、「ひたすら吾貞操をうれしとおぼして」欲しいと思ふのである。心変わりした男性への情愛は、消えるどころか激しさをま

し、固くなっていく心には、怒りの感情が湧き出して押さえきれなくなる。それにしても、怒りの矛先が心変わりした男性でなく寵愛を受けている女性に向くのは何故だろう。女性にとって愛した男性は、同時に自分の一部になってしまふから、傷つけられないのだろうか。

情愛が極まった真女子は、身の振り構わず一心に想いをぶつける。それが執拗と映り、恐怖の根源と化した彼女を、豊雄は「丈夫心」を振り絞り厭伏する。しかし、真女子は妖怪であると同時に、豊雄の理想の女性でもある。彼女への厭伏は同時に、自らの手で理想の女性を鎮め、自らの夢を封じ込めることを意味する。そうして現実に対峙した豊雄に精神的成長をみて、話は閉じられるのである。

しかしながら、一件落着で終わったというのに、読者の心は何故かすっきりとしない。理由は、真女子の純粋な想いが報われず、悲劇と化してしまったことにある。言動は越えてはいるが、彼女の想いは「真情」であった。

豊雄は真女子に対して、こんな恐ろしいことをいうなんて気味が悪いと責め、これ以上犠牲者を出さないために、私を何処となり連れて行くがいい、と言い放つ。真女子はそんな冷たい言葉でも「いと喜びに点頭をる」（ひどく嬉しそうにうなずいている）、嬉しいという一言に尽きるのだ。彼女にとって、嫌悪されてよ、と、豊雄が自分の傍にいてくれるだけで十分なのである。真女子を描写するこの一句には、まさに、愛情に囚われた者の身勝手さと悲哀が凝縮されていて、思わず嘆息を漏らさずにはいられない。

## 八 中国白話小説引用の意図

筆者は以前、「菊花の約」と中国白話小説の引用における考察を通し、以下の結論を導いた。

秋成が趣向を取り入れる意味は、その表現の斬新さのみを用いるだけではなく、あくまでも、その一つ一つの引用箇所が表現する意味を、作品に取り入れることを目的としている、と。ゆえに先行作品の探索と、その典拠内容の理解が大切である、と。<sup>13</sup>そして、今回の「蛇性の姪」への中国白話小説の引用の考察からも、同様の結論に至った。

このことから、秋成が『雨月物語』に中国白話小説を引用する時は、構成から台詞一句に至るまで、典拠の内容を取り込む意図があるのだとみている。これまでの考察をみる限り、秋成が『雨月物語』創作において白話小説に向かう姿勢には、いたって真摯に作品群を読み込み、典拠の髓を移植させようという様子が顕著に感じられる。ところが徳田氏は、「蛇性の姪」に織り込まれている遊戯性の意味について、次のようにいう。

「蛇性の姪」の最終部に、実在の道成寺の塚の由来をいかにも尤もらしく説き明かしている形を取っている一文がある。<sup>14</sup>粉本の中国白話小説と日本伝説の一部の類似を利用して、巧妙に道成寺伝説を緋い交ぜたところが、作者の和漢に渡る学問と、精緻な才気の見せ所であった。付会された物語の内容が、中国白話小説だと知らない読者は、信じてしまうだろう。これを見破るところに、読者側の知識と才気はかれるのであり、「文人」の知的遊戯が成り立つこととなる。<sup>15</sup>

さらに、井上氏は『雨月物語』の知的遊戯について、従来は和歌・物語など雅文芸に限定されていたが、「俳諧をベースに幅広い背景を考えてこそ全体像が見えてくるはずだし、雅俗のあわいに成り立つ「遊戯」の意味を問うことも可能となろう。」<sup>16</sup>と俳諧を考察する必要性を指摘している。続けて、俳諧を読み込んでいる秋成の創作態度からは、戯作であることの遊戯性を十分意識している姿勢がうかがわれるとし、前期戯作は後期へ受け継がれていないという論への、反駁となっている。

「蛇性の淫」の側面は、考証随筆やそうした内容を含む後代の読本にも近く、『雨月物語』を孤高の作品にとどめてはおかないことになろう。そうした遊戯性ゆえ、秋成が豊雄の「丈夫心」にこだわった理由、すなわち底鐘の「義氣」（『英草紙』序）とも通じる真面目な寓意を作中に取り入れた意味も分明となろう。秋成は戯作に徹しきることではできなかったと推測される。文芸の世界に耽溺し、実生活を顧みない豊雄の負は、秋成自身を含めた知識人の陥穽であり、明和から天明の文芸にはその色が濃厚であった。秋成がいかに王朝文学を引用しようと、「丈夫心」を推奨しようと、秋成の意識の中の「道々しき」と「芸能」（『癩癖談』上）との価値関係については、漢学以来のそれを脱しきってはいなかった、と見てよからう。<sup>17</sup>

ここで氏は、「蛇性の淫」に遊戯に徹しきれない姿がある、とも言っている。それは、本論で述べてきた中国白話小説の要素が意味する役割とも一致する。両氏が「知的遊戯」と説く対象要素は、日本の伝説であり、和歌・物語であり、俳諧である。いずれも日本文学の領域であることがわかる。本論で明らかになったことと照らし合わせてみると、以下のことがいえるのではないだろうか。

秋成は「蛇性の姪」を創作するにあたり、遊戯性を意識する際には日本古典文学の様々なジャンルを趣向として取り込み、中国白話小説からの趣向からは、原典の含意を緬い交ぜることを意図としたのだ、と。今まで遊戯として捉えられていた中国白話小説の引用部分を、典拠内容を念頭に置いて考察してみると、さらに違う意味が現れてくるかもしれないと、筆者は考えている。何故なら、『雨月物語』の各作品で白話小説が典拠とされた部分を追っていくと、「遊戯性」という余裕どころか、人間の内面の深い部分に惹かれ、何とか形にしてみたという秋成の意思が絶えることなく湧き出してきた、その切迫した思いと多感さに、目眩を覚えるほどだからである。

秋成は都賀底鐘につき、意識して白話小説に接していた。つまり、その当時の知識人よりも格段に白話小説に精通していたといえる。本論で挙げた三作は、当時訳本が出ていなかった。秋成はこれら粉本の原文を都賀底鐘のところで読んでいたのだらうといわれる。ということは、当時の文人達が日本文学ならまだしも、当時目新しい中国白話小説の趣向を目敏く理解できると、秋成は思っていたらうか。遊戯性をもたせるには、皆が適度に知っている対象でなければ成り立たない。ゆえに、文人が一般に馴染みのある文学——和歌・物語・説話そして俳句——がその役をあてがわれた。そして、まだ十分な訳文のない白話小説は、文人達の精通するまでに至らなかったため、「遊戯性」という役割を担わせられず、あくまでも作者の思考を刺激し、思想を表す担い手として、作品に取り入れたのではないだろうか。

「蛇性の姪」の中の中国白話小説要素が、人物に織り交ぜられることによって、生き生きとした形象を施せる

こととなった。それを紐解くことで見えてきたものは、典拠の意図するところを十分に作品に取り入れようとする、作者の旺盛な創作意欲であり、人間の内面という世界に向けられた暖かで冷静な視線と、その不可思議な世界を何とか現そうとただひた向きに創作に取り組む、秋成の真摯な姿であった。

- ・「蛇性の姪」は中村幸彦代表編『上田秋成全集』第七卷（中央公論社、一九九〇年）によった。
- ・「白娘子永鎮雷峰塔」は馮夢龍著『警世通言』（中国和本体系、江蘇古蹟出版社、一九九一年）によった。
- ・「汪信之一死救全家」と「楊思恩燕山逢故人」は馮夢龍著『古今小説』（中国和本体系、江蘇古蹟出版社、一九九一年）によった。
- ・「江口の遊女薄情を恨みて珠玉を沈る話」は徳田武・横山邦治校注『繁野話 曲亭伝奇花釵児 催馬楽奇談 鳥辺山調絃』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九二年）によった。
- ・「源氏物語」は阿倍秋生、秋山虔、今井源衛校注・訳『源氏物語 一』（日本古典文学全集一二、小学館、一九九二年）によった。

引用文の日本語訳は、すべて筆者による。

注

- (1) 中村幸彦著「序説」(『中村幸彦著述集 第四卷』中央公論社、一九八七年)、一三頁。

- (2) 前掲(注1)、一三頁。
- (3) 「初期読本の作家達」(前掲(注1))、二四九頁。
- (4) 鶴月洋著『雨月物語評釈』角川書店、一九七八年、五六四・五頁。
- (5) 徳田武著「読本における主題と趣向——底鐘から秋成へ——」(稲田篤信編『日本文学研究資料新集8 秋成・語りと幻夢』有精堂、一九八七年)。
- (6) 前掲(注3)、二五一頁。
- (7) 前掲(注4)、五五九・六〇頁。
- (8) 高田衛著「解説 雨月物語」(中村幸彦・高田衛・中村博保校注『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』日本古典文学全集48 小学館、一九七三年)、四九頁。
- (9) 前掲(注4)、五六二頁。
- (10) 「銃」に同じ。
- (11) 中村幸彦著「雨月物語」(中村幸彦編『秋成』、角川書店、一九六三年)、一五五頁。
- (12) 「見其夫装束、问知其情、乃出房对汪革说道：『公公素以豪侠名、积渐为官府所忌。若其原非反叛、官府亦自知之。为今之计、不若挺身出辨、得罪犹小、尚可保全家门。倘一有拒捕之名、弄假成真、百口难诉、悔之无及矣!』汪革道：『郭都監、吾之故人、来时定有商量。』遂不从张氏之言。」(夫の身支度を見ると、事情を聞き、部屋を出ていくと汪革に言った：「お父様は平素豪侠として、次第に官府が恐れをなす人物となっています。もし本来謀反を起こしたというわけでなければ、官府もご存じのことでしょう。今打つ策としては、率先して自ら弁明に赴かれるのがよいと思います。罪になったとしても小さくて済むでしょうし、なお一家全員を守ることにのみならず。もし万が一、抵抗して捕縛を逃れようとした、などという名がたつものなら、嘘が真となり、どんなに弁明したとしても聞き入られるのは難しくなるでしょう。後悔しても仕切れないこととなりますよ。」汪革は：「郭都監とは旧友だ。来たら相談されるはずだ。」と言って、張氏の言葉を遂に聞き入れなかった。)
- (13) 拙論「菊花の約における信義について」(『高崎経済論集』第四八巻第四号、二〇〇六年三月)、二二八・九頁参照。

照のこと。

(14) 「蘭若に帰り給ひて、堂の前を深く掘せて、鉢のままに埋させ、永劫があひだ世に出ることを戒め給ふ。今猶蛇が塚ありとかや。」を指す。

(15) 前掲(注5)、一四九頁。

(16) 井上泰至著『雨月物語論——源泉と主題』笠間書院、一九九九年四月、九一頁。

(17) 前掲(注16)、九一・二頁。

〔付記〕本稿は、平成十八年度高崎経済大学特別研究奨励金による助成を受けた研究成果の一部である。